

「坂の上の雲」と「山本五十六」

三多摩支会 国際部

高丸 敏和

司馬遼太郎氏は、小生の愛読する作家の一人であるが、その代表作のひとつ、「坂の上の雲」がTVドラマ化され、2011年暮れに放送された。2009年以降3年に亘る期間をかけた大作である。クライマックスは、東郷提督率いる連合艦隊とロシアバルチック艦隊の間で繰り広げられた日本海海戦である。秋山真之作戦参謀の「天気晴朗なれども波高し」の一文で有名な日本の命運を賭けた一大決戦である。結果として、海戦史上、類を見ない連合艦隊の完勝であった。

また、同時期に映画「連合艦隊司令長官 山本五十六」が公開された。こちらは、ご存じの通り、「リメンバー・パールハーバー」の合言葉で米国を第2次世界大戦参戦に踏み切らせた真珠湾攻撃に始まり（フィリピンだと想定していたのが真珠湾だった以外は米国のシナリオ通りであろう）、日本海軍の大惨敗となったミッドウェー海戦を経て、ガダルカナル島を巡る激戦の中、前線慰問中にブーゲンビル島上空で米軍戦闘機に撃墜され、戦死を遂げた司令長官を主人公としたものである。

本稿では、この二つの時代における日本という国のビヘイビアから、現代の我々の海外ビジネスに生かせる「TIPS」を考察してみたい。

まず、お断りしておきたいのは、本稿での小生の所見は、教科書等に掲載されている歴史認識と異なる部分もあり、その判断は皆様にお任せしたいということである。

「坂の上の雲」の時代、日露戦争は旧満州と日本海を戦場として帝政ロシアと戦った戦争である。日本は、朝鮮半島がロシアの勢力圏に置かれることは、植民地化される第一歩と看做した。座して植民地となるか、とても勝てる相手ではないが、一縷の望みを賭けて戦争を仕掛けるかの選択だった。植民地化されたアジア諸国の悲惨な状況を目の当たりにしている日本は奇跡に賭けた。窮鼠がビッグベアを噛んだのである。

ただ、ここで日本は、なにもせず奇跡を待っていたのではなく、奇跡を起こすべく可能な限りの手を打っていた。

まずは、この時期の日英同盟の締結である。この明治の先人達の優れた洞察力・大局観には脱帽せざるを得ない。

さらには、貧乏国にも関わらず当時の世界最先端の装備と訓練の行き届いた海軍を持ち、意外かも知れないが、陸軍においても歩兵銃・機関銃の性能はロシア陸軍のそれを凌駕していた。そして、その兵の士気の高さも遠征軍であるロシアに大きく勝っていたのである。

また、戦時公債を発行し調達した戦費を革命前夜のロシアの後方攪乱に惜しげもなく注ぎ込み、旧満州に展開するロシア遠征軍への補給を困難にしていた。

そして、戦争と同時進行の早期講和のための和平工作など、当時の国際情勢を的確に分析し、実に効果的な手を打っていたのである。

ここで特筆すべきは、開戦までの間、完全にシビリアン・コントロールが貫かれた点である。政治・外交が優先し、軍事上の戦略を踏まえて最終的に開戦が決定されたのである。

明治維新から30年しか経っておらず、貧しい発展途上国の日本であったが、明治の先人達は、実に驚異的な適応性、柔軟性を持ち、政府の健康な内部統制とそのしなやかな国際感覚には驚嘆の他ない。

戦争のそれぞれの局面において多くの僥倖に恵まれたのは事実であるが、明治の先人達は、国家的危機の中で見事に奇跡を成し遂げた。

「TIPS (坂の上の雲)」:

徹底的に海外情報を収集し、予断なく状況を分析し、課題を抽出し、あらゆる角度から方策を検討し、決断し、実行する。決して、手を抜いてはならない。

特別なこともない、至極、当たり前のことである。

さて、「山本五十六」の時代、太平洋戦争である。

第1次世界大戦後の世界では、既に、英仏を含む戦勝国の欧州列強は、アジア・アフリカに広大な植民地を保有していたが、米国は、カリブ海を中心とする中南米とフィリピンを含む太平洋島嶼地域を勢力圏としていたに過ぎず、中国大陸での植民地利権獲得を志向していた。

米国にとって、アジアにプレゼンスを持つ日本は、目の上のたんこぶであり、排除の対象でしかなかったのである。

まずは、日英同盟を解消させることに腐心し、策謀を巡らせた。日英両国にとって、結果的にこの策謀に嵌って日英同盟を破棄したことが、その後の致命的な結末へのターニング・ポイントとなったのである。

その後、昭和恐慌・世界大恐慌を経て、疲弊した日本は、円安を追い風にして目覚ましい回復を遂げ、それをソーシャル・ダンピングとして非難・排斥した英仏米がブロック経済圏を形成する中で、孤立化した日本は、生き残りを賭けて円ブロック経済圏（旧満州・台湾・朝鮮半島・中国）の構築に活路を求めたのである。

これは、旧満州を含む中国に植民地利権を求める米国と、決定的に競合・対立した。

私見であるが、この時の日本のとるべき道は、英国のスターリング・ブロックへの参加ではなかったろうか。円ブロックとスターリング・ブロックの融合である。ある意味、日英同盟の復活でもある。広大な植民地のそこそこで民族運動が拡がりを見せ、その経営に苦勞する中で、不況にも悩む英国にとっては魅力的な提案ではなかったかと愚考する。

現実には、日本は武力による円ブロック構築の道を取り、欧米列強と対抗・対立し、そこで、出る杭は打たれたのである。世界を相手に戦争して勝てるはずもない。

明治の先人達のように冷徹に情勢分析をすれば、彼らが敢えて三国干渉を受け入れたように、日本は武力による円ブロック構築の道をとるのでなく、欧米列強（特に、英国）とアジアの権益をシェアする方向の選択肢もあったのではないだろうか。

明治の先人達は、彼我の力関係と国際情勢を冷静に情報収集・分析し、膝を屈する

時は、そうしたのである。

しかし、日本は、日独伊三国同盟を締結、米国と抜き差しならない状況を惹起して、泥沼の中国戦線に加えて、国力20倍の米国だけでなく、英国・オランダとも同時に戦端を開いた。米国の思う壺である。勝てるわけがない。どのようにして、戦争を終結させるかのプランもなく、当時の日本国内に漂う空気に流されていったのである。

ちなみに、ヒットラーは、その著書の中で、アジア人を劣等民族としており、当時の独は信頼の置ける国ではなかった。現に、1941年に一方的に独ソ不可侵条約を破棄し、独ソ戦を開始している。また、ドイツ第三帝国確立後は、日本との戦争も想定していたとの説もある

驕慢で内部統制が欠如し、楽観的事実歪曲に満ちた軍部（本来、軍隊こそ合理主義の権化であるはずなのに、旧日本軍の様相は理解し難いものがある。暴走する旧満州の関東軍を統制できない陸軍。何回、図上演習を繰り返しても、毎回、米軍に敗北していたにも関わらず、開戦に合意した海軍の有り様である。無責任極まりない。）、情報収集・分析・判断・交渉・指導力など機能劣化した政府（政治）、戦争を煽りに煽った最も罪が重いと云わざるを得ないマスコミ、国家戦略も大局観も何もあったものではない、日本中が、当時の閉塞感の中で、軍部同様、楽観的事実歪曲に陥っていたといえるのではないだろうか。「赤信号、皆で渡れば怖くない」ということであろうか。自殺行為である。

明治の人々の、その驚異的な適応性、柔軟性、しなやかな国際感覚は、時代を経て変質・劣化してしまったようである。

戦争の結果は無条件降伏であった。

「TIPS（山本五十六）」:

- ① 海外ビジネスの相手に関して、自分サイドに都合の良い「楽観的事実歪曲」は、厳に慎むべきである。
- ② 海外ビジネスでパートナーシップを組む相手は、信頼の置ける相手であること、自分に利益をもたらす相手であること、を可能な限り検証する必要がある。

こちらも、当たり前のことといえるが、多分、当たり前のことを、当たり前にやることが、海外ビジネスの要諦なのであろう。

日露戦争と太平洋戦争の時代を、大急ぎでサマライズして、小生の勝手な解釈で導き出した「海外ビジネスの TIPS」をご紹介させて頂いた。少しでも参考として頂ける部分があれば望外の喜びである。

最後に、小生は、決して帝国主義を礼賛するものではなく、全く逆の立場をとる者であることを申し上げておきたい。

以上